第 30 回　2050 年の日本は？（その 2）

―女性活躍の時代へ？－

（2025 年 1 月 15 日）

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。早いもので、「教養講座」も今年で 5 年目、30 回目を迎えました。今回は「2050 年の日本は？（その 2）」として、「女性活躍の時代へ？」と題してお話ししたいと思います。人口が減少し、人手不足や人材不足が深刻さを増す時に、才能ある女性が社会で活躍できることが、日本の将来の為に必須と考えているからです。2050 年にはどうなっているでしょうか？ちょうどタイミングよく、小池都知事が 2024 年 12 月 3 日に開かれた「令和 6 年第 4 回都議会定例会知事所信表明」の中で、女性にとって働きやすい職場の環境造りのために、「世界から大きく立ち遅れる女性活躍は、我が国の積年の課題であります。女性活躍の輪を日本全体に広げるプロジェクト『Women in Action』を大々的にスタートさせ、男性も女性も分け隔てなく活躍する調和のとれた社会を広げてまいります。具体的には、フレックスタイム制を活用した週休 3 日や子育てと仕事の両立のための新たな部分休暇（これは、小学 3 年生までの子供がいる職員に対し、勤務時間を一日最大 2 時間短縮できる制度のこと）など、より柔軟な働き方を可能とする制度を来年度から導入することとしました。出産や育児といったライフイベントによって自らのキャリアをあきらめることがないよう、今後も都庁の働き方を柔軟に見直します。望む人が安心して子供を産み育てることができる社会にすることも重要です」（東京都公式ホームページより）と述べております。この対策が「女性が活躍できる社会実現への大きな一歩」になればと思います。皆さんの勤めている職場は女性にとって働きやすい職場ですか。

女性が社会で活躍しにくい根本的な問題は Gender Gap（社会における男女格差）にあるのではないでしょうか。そこで、日本と世界の国々とを比較して、日本の現状がどのような状況にあるのかを、World Economic Forum（世界経済

フォーラム）が 2024 年 6 月に発表した“Global Gender Gap Report 2024”（英文）の中の、”The Global Gender Gap Index 2024 Rankings “（世界男女格差指数 2024 年版ランキング）を調べてみました。146 カ国を対象に四つの分野、Economic Participation and Opportunity（経済活動の参加と機会）、Educational Attainment（教育達成度）、Health and Survival（健康と生存）、Political Empowerment（政治エンパワーメント）のデータを分析・評価し、最終的に「男女格差」についての総合順位をつけております。

先ず、総合順位から見ていきます。スコアは、1 が完全平等、0 が不完全平等を表します。

表 1　　The Global Gender Gap Index 2024 Rankings

総合順位・国名	スコア	総合順位・国名	スコア
1 位　アイスランド	0.935	14 位　イギリス※	0.789
2 位　フィンランド	0.875	22 位　フランス※	0.781
3 位　ノルウェー	0.875	24 位　オーストラリア	0.780
4 位　ニュージーランド	0.835	25 位　フィリピン	0.779
5 位　スウェーデン	0.816	33 位　メキシコ	0.768
6 位　ニカラグア	0.811	36 位　カナダ※	0.761
7 位　ドイツ※	0.810	43 位　アメリカ※	0.747
8 位　ナムビア	0.805	48 位　シンガポール	0.744
9 位　アイルランド	0.802	87 位　イタリア※	0.703
10 位　スペイン	0.797	94 位　韓国	0.696
		106 位　中国	0.684
		118 位　日本※	0.663

注 1：The Global Gender Gap Index 2024 Rankings を参考にして作成

注 2：国名の後の※は G7 諸国

ベスト 10 と G7 を含む主要諸国、アジア諸国を中心に表 1 を作成いたしました。表 1 から見て分かるように、特徴はベスト 10 に入っている国が、ヨーロッパ諸国が 7 カ国（70%）であることです。それに、この表では分かりませんが、ヨーロッパ諸国がベスト 10 以外でも上位にならんでいることです。日本は残念ながら、G7 諸国の中では最下位であり、更に、シンガポール、フィリピン、ニュージーランド、中国、オーストラリア、韓国よりも低く、146 カ国中 118 位です。日本の Gender Gap（社会における男女格差）の問題が、小池都知事も仰っていましたが、世界と比較してかなり遅れていることがはっきりと理解出来た

と思います。しかし、こういう結果を見ても、皆さんはもう驚かないのではないでしょうか。これが、日本の現状だからです。

次に、「経済活動の参加と機会」の分野を見ていきましょう。今回は、「経済活動の参加と機会」の分野に焦点をあてました。スコアは、1 が完全平等、0 が不完全平等を表します。

表 2　Economic Participation and Opportunity

順位・国名	スコア	順位・国名	スコア
1 位　リベリア	0.874	18 位　シンガポール	0.779
2 位　ボツワナ	0.854	20 位　フィリピン	0.775
3 位　バルバドス	0.848	22 位　アメリカ※	0.765
4 位　エスワティニ	0.840	33 位　カナダ※	0.746
5 位　モルドバ	0.837	36 位　ニュージーランド	0.741
6 位　ベラルーシ	0.817	39 位　中国	0.737
7 位　アイスランド	0.815	42 位　オーストラリア	0.736
8 位　ジャマイカ	0.809	45 位　スペイン	0.732
9 位　ノルウェー	0.799	48 位　フランス※	0.726
10 位　フィンランド	0.796	58 位　イギリス※	0.717
		82 位　ドイツ※	0.676
		111 位　イタリア※	0.607
		112 位　韓国	0.605
		120 位　日本※	0.568

注 1：The Global Gender Gap Index 2024 rankings 2024, results by Subindex を参考にして作成

注 2：国名の後の※は G7 諸国

ベスト 10 と G7 諸国を含む主要諸国、アジア諸国を中心にして表 2 を作成いたしました。表 2 から分かるように、特徴は、ベスト 10 の諸国は開発途上国が多く、また一般に知られていない国もあります。先進諸国はノルウェーとフィンランドの 2 カ国のみです。日本は、これまた、G7 諸国では定位置の最下位です。シンガポール、フィリピン、ニュージーランド、中国、オーストラリア、韓国より低く、146 カ国中 120 位となっています。何故日本は「経済活動の参加と機会」で Gender Gap が遅れているのでしょうか。その原因を調べてみました。「経済活動の参加と機会」は五つの項目からランク付けされております。それは、Labour-force participation rate（労働参加男女比）、　Wage equality for

similar work（同一労働賃金男女格差）、 Estimated earned income （所得男女格差）、 Legislators, senior officials and managers （管理職男女比）、Professional and technical workers (専門職・技術職男女比) の 5 項目です。それでは、この 5 項目の順位とスコアを見ていきたいと思います。

表 3　　Economic Participation and Opportunity (120th)

項目	順位	スコア
労働参加の男女比	80 位	0.768
同一労働賃金男女比	83 位	0.619
所得男女格差	98 位	0.583
管理職男女比	130 位	0.171
専門職・技術職男女比	105 位※	0.690※

注 1 ：Index of Country Profiles　Japan より作成

注 2：※は 2021 年データ

表 3 を見て日本の弱点がすぐ分かるのは、「管理職男女比」の項目です。何と順位は 146 カ国中 130 位という、考えられない順位となっています。スコアは不完全平等に近い 0.171 という驚くべき低さです。これは、日本社会の持つ古い体質（男尊女卑など）が原因ではないでしょうか。「男尊女卑」という言葉は現代では死語となっていると思いますが、どっこい日本人の身体の中には、まだしみ込んだ遺伝子として残っているものと、私は思っております。

それでは、「管理職男女比」の国際比較についてさらに調べてみました。「独立行政法人労働政策研究・研修機構のデータブック国際労働比較 2023」によれば、管理職に占める女性の割合は下記の通りです。

表 4　　管理職に占める女性の割合

国名	女性の割合（%）	国名	女性の割合（%）
フィリピン	53.0	イギリス	36.5
スウェーデン	43.0	ドイツ	29.2
アメリカ	41.4	イタリア	28.6
オーストラリア	40.0	マレーシア	21.9
シンガポール	38.1	韓国	16.3
フランス	37.8	日本	13.2

注 : 独立行政法人　労働政策研究・研修機構のデータブック国際労働比較 2023 を参考にして作成

「管理職に占める女性の割合」が極端に低いのは、Gender Gap の象徴的な課題であり、女性が社会で活躍しにくい環境を生み出しているのではないでしょうか。ただ、社会での「男女格差」のない環境を作りだすことは、そう簡単にはできません。世界経済フォーラムは Global Gender Gap Report を発表したのは 2006 年からですので、18 年間の推移を、表 5 のようにまとめてみました。

表 5　　日本の Gender Gap の総合順位の推移

調査発表年	総合順位	スコア	調査国数
2006	79 位	0.645	115
2010	94 位	0.652	134
2015	101 位	0.670	145
2020	121 位	0.652	153
2024	118 位	0.663	146

注：World Economic Forum：Global Gender Gap Report 2006,2010,2015,2020,2024 を参考にして作成

表 5 を見てすぐ分かることは、ここ 18 年間でほぼ変化がないことです。スコアは 0.645 から 0.670 の範囲であり、2015 年の 0.670 が最も高いスコアとなっています。表 5 から見て、25 年後の 2050 年までに Gender Gap が大幅に改善されることは相当困難ではないでしょうか。Gender Gap が少なく、女性が活躍できる社会を実現するには「一歩一歩」前進していくしかありませんね。その意味では、第 2 弾として（第 1 弾は都庁の女性活躍への改革）、今月の 24 日(予定)から始まる通常国会で、国際的にも国連女性差別撤廃委員会などから是正勧告されている、現在の日本の結婚時に夫婦どちらかに改姓を義務付ける「夫婦同姓制度」に対して、「選択的夫婦別姓制度」法案が提出され可決されるかどうかを先ずは見守っていきたいと思います。一歩一歩前進していけば、2050 年までには Gender Gap が少なくなり、女性が活躍できる社会に近づいているかもしれません。日本の将来にとって、女性が活躍できる社会の実現が必須だと思っております。

【追記 1】福岡県の北九州市は 2024 年 12 月 25 日に、2025 年 1 月 20 日から週休 3 日が可能となるフレックス制を全面試行すると発表いたしました。市によると、「通年の服装軽装化（これは 2024 年 12 月 25 日から実施）と併せて、個々のライフスタイルをデザインできる市役所の取り組みを推進することで、働きやすい市役所、選ばれる市役所を目指す」とのことです。政令都市としてフ

レックス制の採用は初めての試みのようです。具体的には、勤務時間を午前 7 時から午後 8 時までに拡大し、平日の勤務時間を長くすれば、1 日を限度に平日を休日にできる制度のようです。但し、午前 10 時から午後 3 時まではコアタイムとして、その時間帯は必ず勤務する必要があるとのことです。試行期間ですので、この制度が女性にとって働きやすい職場になるかどうか注目したいと思います。

【追記 2】第 29 回の教養講座「人口減少問題について」で、「2024 年の出生数は 70 万人を割り込み、68 万人台と予測」しましたが、2024 年 12 月 3 日の日本総研の発表によれば、「2024 年の出生数（日本人）は 68.5 万人になる見通し」とのことです。私の予測が当たりました。更に、2026 年は 60 年に一度の丙午（ひのえうま）の年にあたり、迷信により出生数は 60 万人を割るかもしれません。

（次回は 3 月初旬を予定しております）